

■ 特定課題セッションⅤ 報告

「社会福祉政策・実践における“地域モデル”を考える」

コーディネーター：川池智子（山梨県立大学・佐賀大学大学院）

市町村や圏域等の特性を生かした“地域モデル”の意義を考えるというのが、テーマの趣旨だった。まずテーマ企画者の視点で、セッションからみえてきた事のポイントを示す。

(A) 「福祉改革」のもとでも、現実には“金太郎飴の輪切り”になりがちだった自治体の福祉計画や施策が、国から“丸投げ”された地域自立支援協議会により“揺らいだ”。

(B) “地域モデル”創生のプロセスでは、研究者と政策担当者、福祉実践者との“対等”な論議・調査・事例研究・検証による方法論の模索こそが、新たな発見を理論化へ導く。

(C) 大学人の私たちと地域の福祉行政マン・ウーマン、福祉専門職、学生、当事者・市民が共に汗を流す〈教育・研究・政策・実践〉の繋ぎ目から“地域モデル”が生まれる。

(D) 地域において実践と研究の交わるところの“地域モデル”の研究は D. A. ショーンというところの“省察的研究”である。

(E) “地域モデル”策定に大学が果たす役割は大きい。社会福祉の「地方分権」が本格化し、全国津々浦々に福祉系学部ができた〈今〉、双方の連携のもつ意義が深まっている。

以上、セッションのエッセンスを紹介した。バリスタ・マエストロの如く抽出が成功した否か、コーディネーターが「責任と権限を負う」ことをご容赦いただきたい。与えられた紙幅で報告・討議、参加者との意見交換—全国各地の福祉専門職、地域福祉学の泰斗、ある大学の学長さんらの参加を得た—を要領よく纏める力量はない。他日を期す。※

ところで、遠藤洋二会員、小林明子会員による、地域自立支援協議会の実践が政策・方法論研究へ波及しているという報告は極めて貴重なものであった。上記の(A)(B)を学ぶことができた。ただし、“揺らぎ”は、「地域格差」も生じさせている。しかし混迷は、新たな展開への胎動かもしれない。自立支援協議会に特化した研究も必要であろう。

寫末憲子会員の I P E、I P W の報告からは、ことに(C)(D)の部分に貴重な示唆を得た。

(E) は、報告者・参加者との討論から浮かび上がったことである。当然のことだといわれれば、そうであるが、それらの総合的な実態把握と成果の分析を散見したことはない。

最後の〈まとめ〉として一つ、本質的な提起をさせていただく。「大風呂敷だ」との批判があれば喜んで受けよう。今回の三報告のみならず、全国で様々な“省察的研究”としての“地域モデル”実践・研究が行われているであろう。理論化なしえてないものであれ、寧ろ理論化途上の“地を這うような泥臭い”帰納法的研究・質的研究には、価値がある。

社会福祉〈学〉の独自性への問いへのヒントがそこに潜んでいる、と考えるからである。

※川池編、社会福祉の新潮流① 新・社会福祉論—基本と事例、学文社、2012年3月。第8章